文 献 研 究

Doll Play Techniques に関する文献的研究 *

依 田
古 沢 頼 雄
堀 越 清

新**
古 畑 和 孝
仁 科 弥 生

I. Doll Play Technique の意義と問題

1) 序— doll play technique の導入

子どもが自己の意志を伝達し、その感情を表現するために言語や文字を使用することは、可能であるにしても量的にもまた内容的にも、極めて限定され貧弱である。そこでそれを補うものとして動作、遊びの果している役割は大きい。遊びを通じて、子どもはその欲求やさまざまな情緒感情を自然に表出し、あるいは日常生活経験や対人関係を再現することもある。あるいは現実の世界の中では表面化されずに抑圧され禁止されているものをも遊具を媒体として作り出される想像の世界では、その禁止から解放され、自らの内なるものを、与えられた遊具に投射して自由に遊んだりすることができる。遊びのこのような性質は、子どもの心理療法において取上げられ遊戯療法 (play therapy) とか遊戯技法 (play technique) として種々な立場から発展してきている。遊びそれ自体が直ちに治療そのものというわけではない。遊びの中に感情を表現するように導かれ、遊びを媒体 (media) として、子どもは治療者 (therapist) との間の新しい人間関係に参加し、自己の葛藤・不安・緊張・敵意等を表出しまた遊びの場面を通じ、新しく事物の意味や対人関係を学習し、次第に現実接近していくこととなる。また治療者は、この遊びを用いて、子どもの診断と治療をあわせおこなっていくのである。

doll play が投射的道具 (projective tool) として、幼児の治療場面において役立ち、価値があることは、Freud, A. や Klein によつてはじめて認められた。しかし診断・治療の主たる道具として doll play が用いられたのは、解放療法 (release therapy) の創始者として知ら

れる Levy (25) においてである。Levy は父・母・兄弟・赤ん坊から成る標準化した家族ドル・家具・積木等の遊具を用いて、子どものもつ葛藤や、その投射がよく現れるような場面を構成し、その状況に問題をもつ子どもとともに入つて、抑圧された感情の解放・浄化 (catharsis) をはかつた。その兄弟抗争 (sibling rivalry) に関する実験的研究は特に有名である。子どもは許容的雰囲気の中で次第に敵意 (hostility) を示すようになり、その敵意が子どもの特殊な情緒の行動型と一定の関係を示すことを明らかにした。それを(1)原始的敵意 (primitive hostility) (2)所有敵意 (possessive hostility) (3)退行 (regression) (4)自罰 (selfpunishment) 等四つの原型 (primitive patterns) とその変型とに彼は分類している。Conn (1939) (12) もまた doll play を用いて兄弟抗争の研究をしている。Baruch (1940) (7) は実際の家族構成と同様な人形を用いて、半ば構造化した play interview によつて、子どもの態度、とくにその家族に対する攻撃的行動について研究した。Despert (1940) (13) は就学前の子どもの性格反応 (personality reactions) の研究の方法として、紙とクレヨンで絵をかく遊び (drawing play) とともに、男・女・赤ん坊・男児または女児の夜着を着た四つの人形、三部屋ある家などから成る doll play を用いて研究し、種々の記録をとり分析している。その結果、Despert は、人形を自分の家族と同一視するのは普通であること、家庭生活をそれぞれ現実的にまた空想的に劇化すること、攻撃的反応は最も目立つたものであり不安反応は起るが満足気な感情反応は普通はないこと、身体的機能への興味はしばしば示されることなどを明らかにした。その他、このような実験的事態ではなく、遊戯療法の中で、その自由遊びによく用いられ、臨床的効

* The survey of the studies on doll play techniques.

** by Yoda, A.; Furuhashi, K.; Kosawa, Y. (University of Tokyo); Horikoshi, K. (Toho Music College) & Nishina, Y. (Tsuda College)

本研究は文部省科学試験研究費による「ドル プレイ テクニックによる幼児の人格診断」(研究代表者、依

田新)の一部をなすものである。

本論はつぎのように分担執筆されている。

I. Doll Play Technique の意義と問題 (古畑)

II. Doll Play Technique の方法論的検討 (古沢, 古畑, 堀越)

III. Doll Play における幼児の攻撃的行動 (仁科)

果を挙げている。

doll play は他の遊具・遊びに比し、どんな特徴を有するのであろうか。Lebo (1958)(21) は非指示的遊戯療法において用いられている代表的遊具62種を取上げて、実験的に、発言量を測度 (measure) として、材料としての適当さを調べているが、それによると、doll play はその発言量は圧倒的に多く、断然一位を占めている。このことから、子どもの発言・感情表出を誘発しやすいことが知られる。Bell (1948)(8) は、子どもの空想について、doll play を picture story 法と比較し、doll play では非主題的 (non-thematic) なものの比率は多いが、より多くの反応が得られることを示した。

しかしただ量的な面でのみ、doll play は著しい特徴を有しているわけではない。子どもは、自分自身やその家族を、doll のそれと同一視しやすいし、また doll play は、家庭生活を反映し、その家族関係、家族内各成員に対する種々の感情・葛藤・敵意・不安等を出しやすいたことが、諸研究によつて認められている。

2) doll play と実験室的諸変数との関係

このように doll play は他の投映法と同様に、子どもの行動・動作を通じてそのパーソナリティを把握しようとするものであり、臨床的効用は大きい、Sears, R. (1947)(31) が指摘しているように、子どもの遊びの性質は曖昧であるので、それから直ちに解釈し予測しようとするには、危険がある。またある行動が実際には子どものパーソナリティとは関係のない、実験条件のような変数の影響であるにもかかわらず、誤つてそれをその子自身のパーソナリティと関係づけて評価する恐れもある。そこで方法論的検討が必要となつてくる。この点に関しては、IIにおいてやや詳しく具体的に述べられるが、ここではごく簡略にその問題点を一瞥する。

方法論的研究の必要を認めた Sears ならびにその門下は、①記録・測定 ②材料——現実度、呈示の際の構成度、空想刺戟の程度、ドルの家族構成等 ③実験者と子どもとの交互作用 ④施行の時間等についての一連の実験的研究を進めていった。

まず記録や測定の方法については、それ以前には主題内容の質的分析が主であつたのに対し、種々の観察の範疇を設けて、観察行動を数量化する方向へと推し進めた。

材料については、ドル・ドルの家・ドルの家具等に関して、現実度の高い群と低い群とを設けて比較検討している研究がある [Phillips (1945)(29)]。また材料の呈示の様式については、Pintler (1945)(30) が、組織立てて与える形式 (organized form) と、ばらばらのままにしておく場合 (unorganized form) について比較している。

ところでどういう材料が子どもの空想をよく刺戟するであろうか。この点に関しては、Bremer (1947)(9) は屋内 (household) と屋外 (yard) の二種の空想的環境の setting を用いて、その効果を検討している。子どもは、doll play をする場合、果してどれ位ドルと同一視するのだろうか。どのようなドルを材料にすると、その同一視は高まるであろうか。Robinson (1946)(32) は、この点に関し、家族人形の構成を、父・母・子ども・赤ん坊から成る標準セットの場合と、現実の家族構成と等しくした場合とについて比較検討している。

一般に遊戯療法では、治療者は子どもとの関係に深い関心を抱いてはいるけれども、その交互作用の効果については、余り明らかにされていない。Pintler (1945)(30) はそこで実験者と子どもとの間の交互作用の多い群と少ない群とを実験的につくり、それらの doll play における行動に及ぼす影響について研究している。

施行時間やその回数、あるいはその間隔などもまた、doll play の行動と無関係ではあり得ない。Phillips (1945)(29) は施行時間 20 分を 3 回重ねる場合と 1 時間の場合とについて、検討を試みている。

以上のように具体的には II において論ずるように、Sears ならびにその学派の人達は、doll play の行動に影響を及ぼすと考えられる実験室内の諸要因についての一連の実験的研究を行い、またそれを通して方法論的検討を行つていたのである。

それ以後の実験的な doll play の研究では、何を測度として何をみようとするものであつても、上述の諸条件を吟味し、そのいずれの条件下における研究であるかは明示されている。

3) doll play における行動と先行経験との関係——とくに攻撃的行動と先行経験との関係——

doll play の場面で表現される空想は、たしかに現実の生活内容をそのままに再現しているものではない。しかしそれは現実生活における対人的行動を決定しているのと同様なモチベーションをもち、同じ心理的過程の産物であると仮定されている。ところで現実の家庭におけるしつけ・養育態度は、子どもにしばしばフラストレーションの経験を与える。フラストレーションは攻撃的行動へと導きやすい。だが大抵の場合、母親は子どもの攻撃性を統制し、禁止の方が優位を占める。すると子どもは攻撃性を刺戟されても、親に承認されないような行動は表さなくなる。けれども現実の家庭の事態とはかなり異つた事態においては、攻撃があからさまに起る可能性も大きい。Sears, R. らはこのような考えに立つて、doll play の事態において最も多くみられる行動である

aggression の概念規定を明らかにしているのである。すなわち、doll play の事態は aggression を刺激するに足るほど家庭と類似し、またそれが禁止されない程度に異つていなくてはならない。したがって家族ドル・家・家具等、家庭とある程度類似した材料を用い、しかし同時に aggression に対して許容的な事態として、実験者は友好的にして非評価的な態度で、この事態にのぞむことになるわけである。こういう許容的な態度は、子どもの攻撃表出に対する不安(anxiety)を減少させ、ここに攻撃的行動が表出されるようになると考えられている。

さて doll play 事態での行動が、子どもの動機体系(motivational system)に関係し、その心理的過程の産物であると考えられるならば、遊びの空想(play fantasy)は単に一時的に、事態の性質によつてのみ惹起されたものとする考えることはできない。子どもがいかなる先行経験を有していたかということが当然問題となる。その先行経験としては、純粋に実験条件として構成したもの、また家庭におけるしつけ・養育態度の様態などもある。それにいわば社会学の変数ともいうべき、性・年齢・家族内における位置・父親の存否のような条件も考えられている。

(a) 実験的フラストレーションとの関係

Yarrow(43) は実験的に失敗(failure)および飽和(satiation)によるフラストレーションの事態をつくり、2 回各30分にわたる doll play を施行した。そしてそのような事態では、doll play においては、攻撃的行動、tangential な行動、退行(regression)を示す play などが増大することを明らかにした。この事実、doll play 事態の許容的な雰囲気の下では、子どもの攻撃的表現の禁止が次第に弱められていくとの臨床的観察を実証するものであると Yarrow は述べている。もつともすべての行動が先行経験によつて影響されるわけではない。診断的には重要な他の行動面で、はつきりとは影響されぬものももちろん多くみられたのである。

Chasdi と Lawrence*(1951)(11) もまた、先行経験の変数としてフラストレーションを取上げている。そのフラストレーションは、主として、攻撃に対する罰の問題である。彼らの行った二実験のうち一つは、実験的事態における罰や許容性の効果の検討である。すなわち、子どもが攻撃的に反応することを言語的に承認しない群

(実験群)と、全事態とも実験者が許容的である群(統制群)について比較をした。その結果、攻撃を罰することは、罰がおこる事態での攻撃の頻度や強度を減ずるであろうとの仮説は支持された。

Levin と Turgeon (1957)(24) は、そこで Miller(27) の転移理論(displacement theory)にしたがつて、母親が doll play の事態に存在しているときには、子どもの fantasy aggression は減ずるだろうとの仮説を立て、第一施行では実験者のみ、第二施行では実験者の他に母親のいる群(実験群)と見知らぬ人のいる群(統制群)を設けて実験を行つた。ところがむしろ逆の結果を得た。そこで Levin らは過度に単純化された、このような displacement model をそのまま適用することは必ずしも妥当でないとしている。子どもは、母親が見守つていても、fantasy aggression を表出することが許容されていると感じ、また子どもの super-ego の発達状況からして未だ自制困難のため、かえつて aggression が多くみられたのだろうと考えている。

(b) 家庭における養育態度などとの関係

先行経験として実験的につくりだしたものではなく、家庭における実際の養育態度などを母親との面接や質問紙法などによつて知り、これと doll play 事態における aggression との関係をみようとする研究もある。その二・三を挙げると、まず先述の Chasdi と Lawrence はその第二実験としては、家庭でのしつけを、母親に対する面接によつて、子どもの養育に関する六領域*について評定し、また罰のきびしさについて面接して報告を得これに基いて、フラストレーションと攻撃に対する罰のそれぞれについて高・低の二群ずつを設け、これと doll play においてみられる攻撃との関係を比較したのである。その結果、家庭において母親によつてフラストレーションを経験せしめられる子どもの方が、また攻撃に対してきびしく罰せられる子どもの方が、doll play 事態ではより攻撃的になりがちであることが明らかにされた。なおこの実験は四施行ともすべて子どもの攻撃的行動に対する許容的事態の下で行われたのであるが、第一施行から第四施行までに、攻撃は有意に増大した。

Levin と Sears (1956)(23) は、両親の、子どもの攻撃に対する罰のきびしさの他に、両親のうち主として罰するのはどちらか、子どもの両親との同一視の程度はどうかなどをも考慮に入れて、これらの知見を母親との面接から得て、これらと doll play における攻撃的行動との

* Chasdi と Lawrence が、その論文を執筆したとき(1951)には、Hollenberg と Sperry であつたが、筆者が McClelland (ed.) の Studies in Motivation (1955)に採録されたものによつてみたときには、既に Chasdi と Lawrence になつていた。

* 六領域は 1) feeding during infancy 2) weaning 3) toileting 4) cleanliness 5) health and danger 6) eating からなつてゐる。

関係をみた。その結果、父親と同一視することが最も高く、また父親から罰せられることによつて、男性的攻撃 (male aggression) の手がかりをもっている男児は、最高の攻撃を示した。女児の場合には、きびしい罰を加える母親と同一視しているときにのみ攻撃が多くみられた。なおそれ以前の諸研究の成果と同様に、2回目の方が1回目比し、攻撃は増大した。

母子関係に関係させた研究もある。Isch (1952) (19) は doll play が現実の母子関係を再現するものであるとの仮説の下に、この両者の関係を調べた。この場合、ドルについてはわずかに母親ドルと子どもドルのみを用い、それとともに統制遊びの場面における母子の交互作用を調べた。各 30 分 4 回にわたる doll play を施行した。そして大体において実際母子関係を再現する傾向のあることが実証された。母親が拒否的攻撃的であると、子どもは、子どもドルを攻撃的行動を受けけるように、また母親ドルは非常に攻撃的であるように現わしていた。母親が非常に支配的 (high directive) であると、その子どもは、doll play で攻撃を示すことが少い傾向があつた。doll play が再現的であるとともに、Isch はこの想像的場面で母親ドルに対して表現された攻撃は願望充足行動 (wish fulfillment behavior) と同じ種類のものと考えている。

4) 性・年令・兄弟内の位置・社会経済的地位・父親の存否等の要因と doll play における行動との関係

実験的に生起させた、あるいはまた現実の生活に基いた先行経験と doll play における行動との関係について多少みてきたが、次には、性・年令・兄弟内の位置・社会経済的地位・父親の存否といったいわば社会学の変数との関係をみてみよう。

(a) 男女の性差

Pintler, Phillips & Sears (1946) (31) は焦点をそこに置いた研究をしている。女子の方に多いものには, stereotyped thematic play, * 男子の方に多くみられたものには, nonhuman thematic play, theme change の数, nonstereotyped aggression などがあつた。けれども, exploratory, organizational activity, self-thematic play tangential and tangential play behavior, tangential aggression 等には有意な性差がみられなかつた。これらは幼児期よりの社会的学習による sex typing によつて解釈されている。

攻撃の性差に関する研究はかなり多くがある。たとえば, Bach (4), Yarrow (43), Pintler, Phillips & Sears,

R. (31), Sears, P. (34) などのものがあるが、それらはいずれも、男児の方がより攻撃的であるとの結果を得ている。

(b) 年令差

Sears, P. (1951) (34) は性差以外にも、年令・兄弟の位置・父親の不在等の諸要因の doll play aggression に及ぼす影響について研究している。

年令差については、3才から4才、5才とその攻撃は上昇し、その増加は3才から4才にかけて著しかつた。Johnson (1951) (20) は5才児と8才児との攻撃的行動の型の分析をしているが、その中で、後者の方が攻撃の多いことをも示している。

また Ammons, C. H. と Ammons, R. B. (1953) (3) は2才児から5才児までの幼児各 10 名を用いて、攻撃的反応の発達の変化を、白人および黒人のドルそれぞれ一つずつを使い、doll play interview によつてしらべているが、それによると、直接的攻撃の表出は3才児において最高に達し、それ以後それは次第に減じ、言語的反応へと変化していくことが示された。

(c) 兄弟の位置

兄弟の位置による差異については、Sears, P. (34) は、長子は男女を問わず、doll play において、活動的な粗暴な身体的攻撃をすることが少く、身体を傷つけるような型の遊びを避け、また、両親あるいは少くとも母親との同一視が高いことなどを明らかにした。なお末子や一人つ子は長子に比し、より攻撃的であつた。

Levin と Sears, R. (1956) (23) も一人子・長子・末子・三人以上の兄弟の中間の子どもの4条件につき、比較しているが、それによると一人子が最高の fantasy aggression を示した。また他の分析によつて一人子は両親と最も強く同一視することが知られているが、Levin らは、攻撃に及ぼす同一視の影響と併せ考えると、一人子が最も攻撃的であるとの結果は合理的なものと考えられるとしている。なおこの研究では、末子については、はつきりした結果が得られなかつた。

doll の家族構成についての研究をした Robinson は、一人子と兄弟が一人ある場合についての比較を行つてゐるが、それによると、一般的行動の頻度には有意な差が認められなかつたけれども、攻撃の対象については、一人子の方が self doll に対する thematic aggression は多かつた。

(d) 社会経済的地位

多くの研究では、大学附属の幼稚園児が被験児として使われているので、それらはいずれも、中流の階層の子弟である。Bach, Chasdi ら, Pintler ら, Sears, R. らなどはいずれもそれである。また Yarrow は下層階

* これらはⅡの5資料収集の方法を参照されたい。

級の子どもを使っている。しかしこれらはいずれも、社会経済的地位について、それを一つの変数としてとりあげているものではない。これを変数として取上げているものには、Sears, P. が中の上と中の下階層の子どもについて、攻撃との間の関係をみ、Levin & Sears も、Warner の指標に基いて、中流階級と労働階級についての比較を試みているものなどがあるが、いずれも差異が認められていない。

(e) 父親の不在

戦後、米国においても、戦死あるいは離婚などによる父親の不在の家庭がかなりできたことが反映して、doll play においても、この条件を一つの変数として取上げている研究がいくつか見出される。

Bach (1946)(4) は3回にわたる標準的 doll play を、父親のいる群との比較において施行した。その目的は、空想反応は投映的なものであるとの仮定から、このデータが家族に対する子どもの現実の情緒的適応の inventory を現わすものと考え、父親と長く離れていることによつて、適応はどう影響されるかをみることにあつた。両群とも、家族生活に関する doll play fantasy はほぼ同量であつたが、父親不在群では、父親を含む空想は少く stereotyped fantasy が優勢であり、父親の攻撃的行動が少く、父親が愛情を示す空想や、父親を理想化した空想などが多くみられた。親の愛情に対する強い動因がみられると Bach は指摘している。ところがこれに対し、父親のいる群では、罰や家族間の攻撃が多くみられた。これは、父親の権威によつてフラストレイトされやすく、このことから攻撃的な動機づけが刺激されるが、現実には抑圧され、攻撃的な空想としてその敵意を表出するためであると Bach は考えている。

Sears, R., Pintler & Sears, P. (1946)(39) の研究でもまた、父親不在の子どもは fantasy aggression が少く、男児の場合には特にそのことがはつきりとみられた。そして、父親のいない家庭では欲求阻止的であるから攻撃も多いだろうなどとする仮定は、過度の単純化を示すものだとしている。その他、普通は施行を重ねるにつれ攻撃は増大してくるのに、父親不在の群では男女とも攻撃が増大しないこと、攻撃の方向についていえば、父親のいる男児は、父親ドルや男児ドルへの攻撃の多くみられること、男児は母親よりも父親に対する攻撃の方が多いことなどの結果を得ている。

それよりも新しい Sears, P. (1951)(34) の結果によると、攻撃の総量が減じるなどの影響が男児についてはみられたが、女児の場合にはその影響がみられなかつた。なお、攻撃の量や種類については、男児においても変化

がみられなかつた。

5) doll play interview の方法

以上みてきたものは、いずれも実験的な doll play 法であつたが、その一つの変形を doll play interview について次に簡単にみておこう。これは Levy(25), Conn などによつて記述されているが、Ammons(1949)(1952)(1953)(1)(2)(3) らによつて発展した方法である。面接者がドルに向つて質問し、子どもは、それに対し、ドルに代つて言語的応答を与えるようにドルを操作するのであり、受容的雰囲気の中で、子どもがドルを強く同一視するように次第に構成していき、そこでの子どもの反応から、診断にあるいは臨床に応用しようとするものである。

この方法によつて、Ammons らは、幼児の両親に対する好き嫌いを調べたり、攻撃反応を発達的に調べたり皮膚の色・顔の特徴等の差異の認知およびその程度を調べたりしている。その結果によれば、エディプス理論とは異つて、3才児でさえも既に同性の親を選ぶ傾向のあること、養育の事態では母親を選び、遊びや読書等の事態では父親を選択する傾向のあること、直接的な攻撃は3才児で頂点に達することなどが示された。この方法は短時間で子どもの行動をかなりよく臨床的にまた実験的に研究しうることを、目的によつて質問を予めよく準備しておくことと効果的であること、価値ある技法であることなどを、Ammons は述べている。

6) doll play technique の診断への利用

これまでみてきたところからも明らかなように、doll play 事態における子どもの行動は、たしかに現実生活における対人的行動を規定している動機体系を反映しているものと考えられる。そこで実験室的に創り出した、あるいは家庭におけるしつけの実際の様態などの変数と doll play 事態における行動との間には一定の関係が見出される。したがつて子どものパーソナリティを診断し、その家族関係を明らかにするための有力な手段として、この doll play が活用されることが期待される。けれども、先行経験と doll play の行動との間には一定の関係があるとしても、doll play 事態での子どもの行動から、逆に子どものパーソナリティを診断し、その家族関係を直ちに把握することができるかといえ、そこまでは至っていないといわなければならない。

ただしかし、上述の殆どすべての実験が、正常児のみを被験児としたものであつたのに対し、正常児群と、非行児群あるいは不適応児群などとの比較を試みている次の一・二の研究などは、診断への利用の点でもかなり示唆的なものを含んでいると思われる。たとえば、Bach

と Bremer(1947)(16) は7才から10才の非行児の父親についての空想(father fantasy)を正常児のそれと比較しているが、それによると、父親に対する攻撃の量それ自体は多くないけれども、父親に対し情緒的に関係することが少いか、ないしは無関心であり、少くとも父親ドルは僅かしか用いられず、友好的関心を欠いていた。また正常児にみられるような、父が子を罰する主題とか、父親から逃げかくれたりする主題が少なかった。そこで Bach らは、父親を同一視することは、効果的な社会的適応にとって、十分な条件ではないにせよ、必要な条件として重要だとしている。

また Meister(1948)(26) は、自由な doll play ではなく、可能な外傷的経験を思い出させる行動を引き出すために、両親の性交・食事の問題・排泄訓練等に関する場面を、刺激として利用した。そして適応児群と不適応児群に対する doll play 行動の分析を、action unit, * thematic material, **arrangement***施行の長さ等に関して行っている。それによると、適応児は thematic content が多かったのに対し、不適応児には、一般に action が多く、ただ材料を配列するような行動が多くみられた。Meister は、子どもが遊ぶことを好み、また緊張を生ずるような経験を蒙っていないならば、子どもについての予備知識がなくても、子どもの観察だけから、適応しているか否か、子どもの破壊的または未成熟の程度等を決めると述べている。ただしこの研究では、統計的処理は余り充分ではない。

doll play 法といつても、その意味・具体的方法・内容は必ずしも同一ではない。そこにはかなり巾のある種々のものが含まれている。しかしそのいずれもが、投映的道具としての有用性を認め、この観点に立つて臨床面に利用し、あるいは実験的に、子どものパーソナリティおよびその家族関係を診断するのに活用しようとしているのである。けれども、その信頼性・妥当性に関しては未だ正確な知見を充分には得ていない。この点の追究もまた今後に課せられた課題というべきであろう。

II Doll Play Technique の方法論的検討

doll play technique が純粋な研究方法として成り立

* ドルやドルに関係した行動を含まない行動の単位

** ドルを人物(character)として用いている主題からの行動を含む

*** 主題の一部であるにせよないにせよ、ドルの家具の配列。後述の Phillips などの範疇における organizational behavior の一部に相当するものと思われる。

つためには、児童の doll play 反応を規定する様々な条件に就いて詳細な検討が必要であることはいふまでもないが、特にまず方法的な問題を明白にしてその統制を計ることが重要であろう。これまで、この種の研究は幾つかなされておられ種々な操作的条件が明らかにされつつあるが充分とはいえない。

本節においては、従来の研究を中心にしてこの方法的問題——対象児の年令・性別・知能・材料・教示・施行時間・間隔・回数・実験者と被験児との交互作用・資料収集の方法など——に就いて文獻的に考察する。

1) 対象児の年令・性別・知能

既に述べたように、doll play technique の目的は、幼児・児童の空想的活動を遊びに表現させることによつて彼らの人格の理解を深めようとするものであるから、その対象年令も自然、主として就学前期(3才〜4才〜5才)に限られて従来の研究は行われて来ている。とはいえ、確定的な適用年令は定めていない。

遊びの形式・内容の発達の推移に就いての研究には、従来、遊具の種類と attention span(児童が特定の遊具を用いてどの位持続的に遊ぶかによつて測定した量)との年令的な関係を検討したものがあり、遊具への関心の程度は児童の年令によつて可成り変動するものであることを明らかにして来たが、最近 Moyer and Gilmer(1955)(28) は遊具に対する児童の欲求の充足度という面からこの問題を取りあげ、年令的な推移のみでないことを明らかにしている。ただ、doll play に用いられる材料そのものについての関心の程度の年令的变化は検討されていない。

Sears, P(1951)(34) は doll play に表われる攻撃的行動の頻度が年令的にどの様に变化するかを比較した。が、その結果によると3才から4才にかけては増加が著しいが4才から5才にかけては僅かに増加する程度であることが明らかになった。

また, Ammons, C. H. (1953)(3) は, doll play を用いた interview により児童の攻撃的行動の発達的变化を比較したが、その結果2才→3才と増加し、3才→4才→5才と減少することを明らかにした。

しかし、doll play 反応の他の面に就いての発達的变化に関してはこの研究は触れていない。

対象児の性別による doll play 反応の差異については Pintler, et al.(1946)(31) の研究がある。彼らは5, 6才児80名に就いて60分の doll play を実施し、男女別にそこに表われる行動の性質を検討したが、その結果から次の様な結論を導いている。即ち、①女兒は男児に比較して stereotyped thematic play, 即ち一般の家庭生活に表われ

る様な内容をもつ doll play の頻数が高いこと。②男児は non-human thematic play, non stereotyped aggression, 即ち人間以外の動物、空想物などを作った play やごく独特な攻撃的行動の頻数が高いこと。③exploratory, organizational behavior などに就いては男児・女児間に差が見られなかったこと。又、Sears, P (1951)の研究によると攻撃的行動の表われる頻数は男児の方が女児に比較して顕著に高く、特に男児では身体的に傷害する様な攻撃的行動が多い。さらに、攻撃的行動が向けられる対象に就いては、男児は女児よりと敵愾心を父親ドルに向ける傾向があり、その年令的な程度は3才→4才→5才と漸次顕著になつているといふ。その他の研究(4)(43)でも攻撃的行動に表われる性差についてはほぼ共通の傾向を示している。

知能の程度も doll play に作用する規定因として考えねばならないであろう。この点に就いては詳細な研究は存在せず、これ迄の doll play の研究では知的にごく正常な児童を対象として用いているに過ぎない。しかし、最近の Wang (1958)(43)のものは遊具への関心の程度が知能的に高い児童と低い児童では異つており、そこにかかなりの差異があることを結果しており、doll play に就いてもこの関連は検討されねばならない。

2) 材 料

doll play で用いられる材料は、家族ドル(父親ドル・母親ドル・男児ドル・女児ドル・乳児ドルなど。)家具遊具(miniature toy)又は積木及び衝立(家や部屋のしきりのために用いる)であり、その様式、形態などが児童の doll play に影響することに就いてはこれ迄云々されて来ている。しかし、未だ一定した材料は用いられていない。

一般的な遊具に関してそのもつ性質が児童の行動を規定することを示した研究としては Feshbach (1956)(15) Lebo (1958)(21)などをあげることが出来る。前者は、攻撃的行動を誘発し易い遊具(aggressive play object)とごく普通の遊具(neutral play object)が児童の遊びの内容にどのような効果をもたらすれば検討した。そのために Feshbach は aggressive play object を用いて遊ぶグループと neutral play object を用いて遊ぶグループとを設け、遊びに表われる攻撃的行動の頻数、性質などを比較したところ、aggressive play object のグループの方が空想的な攻撃性(fantasy aggression)を有意に多く示すという結果を得ている。この研究は遊具のもつ性質によって児童の行動が規定されるということを示す一つの例であるが、さらに Lebo は、多くの遊具の中で doll play の材料が特に言語・感情の表出を非常に促し易

いものであるということを約60種類の遊具についての比較から結論している。

以上遊具一般に関してその規定性を問題にしたが、特に、doll play の材料が被験児の反応に対し、どのような意味をもつかに就いては Phillips (1945)(29), Robinson (1946)(32), Pintler (1945)(30)の研究がある。

これらの中でまず Phillips の研究は、doll play に用いられる材料のもつ現実性の程度という面からこの問題を追求したものである。即ち、彼女は材料として比較的模型的な家族ドル(大きさは大人ドルが5.5インチ、子供ドルが3.5インチ、乳児ドル2インチでそれぞれの年令・性などに相応した衣服が着せてある。)居間、食堂セット、風呂場、ストーブ、流し、ベッド3ヶ、乳児用ベッドなどを一定に配置して与えるグループ(high realism group)と白木の積木に近い様な家具セット、ぬいぐるみのドル(大きさは前グループのものと殆ど同じ)を一定に配置して与えるグループ(low realism group)とを設け、両者の doll play 反応がどの様に異なるかを検討した。後に詳述する観察カテゴリーを用いて両グループの play の内容を比較した結果は、high realism material を用いたグループでは他のグループよりも探索的な行動の出現頻数が多かつたこと、これに対し、構成的な行動の頻数は low realism material を用いたグループの方が多く表われたことなどを明らかにしている。つまり、材料に現実的な規定を多く加えて与えると材料の性質、役割を吟味したり、調べてみたりする様な行動が多く表われる。これに対し、材料に多義性、空想性をもたせたものを加えると材料の組立て、配置などに多くの時間が使われるということがいえる。

次に、Robinson は家族ドルの構成数によつて被験児がドルを同一視する行動にどのような差異がみられるかという面から材料の検討をした。そこで、彼女は、被験児の家族構成と役割の一致する家族ドルを用いた場合と父親ドル、母親ドル、男児ドル、女児ドル、乳児ドルというセットを用い場合の被験児の doll play に表われる影響を比較した。他の材料は Phillips の研究の high realism material を用い、ドルも性、役割などが弁別しうる程度の外観をもつたものである。材料は衝立によつて作られた6つの部屋に適切に配置された状態で呈示される。その結果、家族構成と同一の家族ドルを用いたグループの方が他のグループよりもドルを同一視する傾向即ち、被験児自身又は彼の家族が丁度行動しているように題材をとり入れて doll play をする傾向が高く、又、母親ドルに直接攻撃的行動を向ける場合も前者のグループで特に頻数が高いこらなどを得ている。この事からし

て家族ドルとして、被験児の家族構成と同一のものをを用いた方が幼児の人格・家族関係をより有効に診断しうる可能性を有していると考えることが出来る。

以上の二つの研究は、材料のもつ様相・構成数などが児童の doll play に影響することを示しているが、さらに、材料の呈示方法も被験児の行動をかなり規定する要因であると考えなければならない。この点に関して、Pintler(1945)⁽³⁰⁾ は材料呈示の際の構成度を変えることによつてその差異を調べた。即ち、彼女は、材料を殆ど配置しないで家具は家具だけ、衝立は衝立だけ、形は人形だけをかためたままで呈示するグループ(unorganized material group) と衝立で部屋割を作り家具を各部屋に配置しておいてから呈示するグループ(organized material group) とを設けた。材料は Phillips の high realism material と同様のもので、その種類もピアノ、机、椅子、ラジオ、ストーブ、冷蔵庫、寝台、便器、風呂などを用いた。この様にして2つの被験児群の doll play に表われる行動カテゴリーの頻数を比較してみると、unorganized material グループでは他のグループよりも材料を配置したり、組立てたりといった organizational behavior の頻数が高く、又、意味のある攻撃的行動も多く表われ易いということが明らかになった。^{*}

以上、doll play に用いられる材料について方法的な検討を加えた二、三の研究について触れたが、これらの結果から、①材料の realism は低く、②材料はかなり配置した形で与え、③家族ドルは被験児の家族構成と同じものをを用いた方が、doll play 中の予備段階ともいふべき exploratory, organizational behavior を少くし、よく投映的效果をはたしうるものと一応考えられる。しかし、doll play technique のために最も有効であると考えられる様な材料の性質、種類、呈示方法などについては後に述べる資料収集の方法とあいまつて今後さらに研究が進められていかねばならない面であろう。

3) 実験者と被験児との交互作用

実験者が被験児を、ドルの家とその前にドルの家族を並べてある実験室に連れてくるまでに、ラポールをつけるように試みていることが多い。そして実験者は子どもとともに、家のおいてある床の上に座り、“さあ、ここに家に住んでいる家族の人たちがいますよ。これがお母さん、……お父さん、女の子、男の子、赤ちゃん。これ

をあなたの好きなようにしていいですよ。これを使つて好きなように遊びなさい。”といった趣旨の教示を与える。基本的には、実験者は友好的な非評価的な態度でいるわけである。

けれども doll play が進行するとき、そこでの実験者のあり方はいろいろある。ただ座つて子どもの方を見ないようにすることもあれば、子どもを注目してはいるが殆ど口も手も出さない場合もあるし、まだ子どものすることに積極的に関心を示し、よく反応することもあり得る。実験者が被験者とどんな交互作用をするかによつてその doll play の行動もまた変つてくるであろう。

この点に関しては、先述の材料の呈示の際の構成度を問題にした Pintler⁽³⁰⁾ が、交互作用の高い群と低い群とを設けて比較検討している。交互作用のレベルの低い群は、ラポールを維持し、場から逃げ出したりしない程度の言動、つまり5分間に5回以上は交互作用をしない程度にした。これに対し、高いレベルでは、5分間に15～20回の交互作用をし、thematic play の方向への一般的刺激を与えることなどを含んでいた。その結果、交互作用のレベルの高い群の方に、より個別的な thematic play や、より多くの異つた主題などが多くみられた。また、thematic aggressive action も多く、はじめて攻撃がおこるまでの潜時が短かかった。他方低いレベルの方では、tangentiality がいく分多くみられた。routine thematic play の量は、両条件で差異が認められなかった。

このように、ある程度交互作用のある方が、種々の有意義な行動が期待できるようであり、交互作用の条件を記してあるそれ以後の実験の多くは、Pintler における高いレベルの方を用いている。

4) 施行時間・回数・間隔

実験者が随意に変えうるもう一つの要因に、doll play session の持続時間がある。遊びの効果は累積的なものであり、一定時間内での子どもの行動の性質は、いく分かは先行経験の函数である。たとえば、通常攻撃がおこるまでには、ある潜時がある。その間は子どもは、攻撃に対して実験者が寛容がどうかをみるのに必要であるようであり、別に仕返しなどしないことがわかると、子どもはだんだん自由に敵意を表出するようになる。だからいくつかの研究でも実証されているように、5分間隔で区切ると攻撃の頻度は連続的に増加していつている。同様に、探索的行動や構成的行動は、主として事態の新しいことに対する反応であるから、最初の5分間に集中してみられる。したがつて、このような活動の相対的な量は子どもがどれ位長く遊んでいるかということと必然的

^{*} なお Phillips, Robinson, Pintler の研究で用いられた被験児は Iowa Child Welfare Research Station Preschool Laboratories にいる3才から6才の I. Q. はごく正常な幼児約40名(男児20, 女児20の割)である。

に函数関係にある。以上のように Sears, R. (37) は指摘している。

では施行時間、施行回数、施行間隔等はどれ位が適当なものであろう。今いくつかの研究における実際を例示してみると次のようになっている。

研究者名	施行時間	施行回数	施行間隔
Bach	20分	3回	2～4日
Bach; Bremer	20分	1回	—
Chasdi; Lawrence	15分	4回	2～4日
Isch	30分	4回	2日位 (1～4回の間隔平均10.6日)
Levin; Sears, R.	20分	2回	1～2日
Levin; Turgeon	20分	2回	2日
Meister	10～40分 (平均 21.8分)		
Pintler	20分	3回	(第一施行と第二施行 1.82日) (第二施行と第三施行 1.78日)
Pintler; Phillips & Sears	60分	1回	—
Robinson	30分	2回	48時間
Sears, P.	20分	2回	翌日
Sears, R.; Pintler & Sears, P.	20分	2回	翌日
Yarrow	30分	2回	1～2日

これによつてみるならば、多くは 20 分または 30 分であり、回数は 2, 3 回のことが多く、施行間隔は翌日から数日以内にわたつてゐる。では施行を重ねるにつれてどのような変化がみられるであろうか。それぞれの研究によつてそのとらえるところは当然異つてゐるけれども、大体共通してみられる特徴としては、普通の許容的な条件下では、回を重ねるにつれて攻撃の増大することがあげられる。Yarrow は、I において述べたように、実験群にしては飽和・失敗等のフラストレーションの経験を与えたが、その経験をしない統制群に対しても、両者に共通してみられる第二施行での変化として、増大したものに、攻撃的行動の総量、nonstereotyped aggression, tangential behavior を、また減少したものとしては、routine thematic play と攻撃の潜時を挙げている。

また Isch は、攻撃の方向の変化をも示している。彼女によれば、攻撃の方向は、回を重ねるにつれ、仕返しのできないもの、すなわち自分自身、子どものドルのようなものから、実験者や母親ドルへと移つてきた。

これらの共通した傾向は、回を重ねるにつれ、子どもの攻撃に対する禁止が減少するためと多くの研究者が考へている。

施行時間は 20 分もしくは 30 分のことが多いが、果

してどれ位が子どもの doll play にとって好適な条件なのであろうか。この点に関しては、Phillips(29) が 1 時間の場合と、2 回の施行が続きの日にならぬよう 1 週間以内に 3 回の 20 分ずつの doll play をする場合とについて比較している。まず、exploration や organization は 20 分のときの方によくみられた。これは、48 時間以上の間隔をおいてまた doll play に入ると、子どもにとってはそれはある程度新しい事態であるためと考えられる。このことは、最初の 20 分についての両者の比較では差異がないのに、それ以後の 20 分ずつを較べると、1 時間施行の方が、exploration や organization が少いことから知られよう。それから、1 時間連続した遊びの場合には、tangential behavior が増大し、また tangential aggression もわずかにもせよ増大するなど、子どもにとって、ときに不安の信号であり、また疲労や倦怠と結びつくこれらの多いことは、3・4 才児にとっては、1 時間一つの活動に集中するのは長すぎることを示すものといふことができよう。

5) 資料収集の方法

doll play technique の資料収集法は、すべて直接観察によつてゐる点では共通しているが、事象のどの面をどの様な順序で捉えるかについては研究目的、研究者などによつてかなり異つてゐる。例えば、Phillips, (29) Pintler, (30) Robinson, (32) Yarrow, (43) などは行動事象の意味・内容という面から、又 Radke は幼児の dollplay をそこに表われる家庭の雰囲気、両親の態度、子供の親に対する態度、兄弟関係、各成員の役割という面からチェック・リスト法によつて記録・評定を試みているし、Isch は母子関係という面から対人関係をとらえることの出来るような行動カテゴリーを用いて記録分析を行っている。さらに Sears その他 (34) (11) (23) は doll play 中に表わされる攻撃的行動のみの頻数・強度・方向などについて資料を収集する方法を試みている。

この様な諸方法は概ね次の 2 種類に分括出来よう。即ち、第一は表出される事象をかなり全般的に捉えようとする方法、第二は事象の特定の面だけを捉えようとする方法である。

まず、前者に属するものとして Phillips の研究(29)に用いられている資料収集法を中心に紹介してみよう。

彼女は doll play を通じて幼児の動機体系 (motivational system) を診断するのに特に有効であると考えられる面として、イ) doll play 中に示される攻撃的行動の頻数、ロ) 被験児個人に特長な play のしめる割合、ハ) かなりでたらめな目的のない行動のしめる割合、ニ) 題材のかわる回数などの項目を考え、これに基づい

第1表 Doll play 観察カテゴリー

(Phillips : 1945 による)

Names of Categories	Sign	Explanation
Organizational	O	材料を組立てたり作りかえたりする行動、或いは材料に名前をつけたり数えたりする行動がこのカテゴリーに含まれる。総じて或る目的をもつと認められる様な行動があてはまる。
Organizational nonstereotyped	Ox	その遊び具合からみてちぐはぐに材料をおく様な行動。
Exploratory	E	材料になじんで行く様な行動一般、例えば手にとつてみる、指でさわる、或は“その戸は開くの”“それは何”という様な質問がこのカテゴリーにあてはまる。
Tangential	T	遊びの事態からは外れた行動で窓から外を見たり、時間を聞いたり、室内をただ歩き廻つたり、見廻したり、その場面から逃げ出そうとしたり、続けることを拒否したりといった行動がこのカテゴリーにあてはまる。
Tangential play	P	材料は使つていながら別に何をやろうということもない様な動作。
Thematic-stereotype, routine behavior	Th	日常生活に一般に見受けられる様な行動があてはまる。
Noustereotype thematic individualized	NSTh	日常茶飯時には見られないようなある子供にごく特徴的な行動をさす。
Self-thematic	STh	被験児自身がある場面で家族ドルと同列の役割を演ずる行動。
Nonhuman thematic	NHTh	ドルを用いなくて前のある活動例えば自動車が山にのぼる。
Aggression	Agg	被験児がドルを通じて敵意をもつてるとみなされる行動を示す場合、及び被験児がドル、材料又は実験者に直接破かい的行動を示す場合、題材自体が破かい的要素を含んでいる場合などがこのカテゴリーに当てはまる。

なお、Robinson (1946)⁽³²⁾ は次の様なカテゴリーをさらに追加している。

Individual thematic	ITh	家庭生活以外の場面で行つている事象例えば戦争、地震、旅行の場面。
Metamorphosis	M	材料が本来の役目からそれたものとなつている場合。例えば、桶が車に、ドルが爆弾に、など。
Inappropriate action	x	題材としてちぐはぐのある場合。例えば居間で水浴びをしたり父親ドルがゆりかごの中でおねるなど。
Identification	i	題材やドルに被験児自身や家族がよく関連している様な活動、私・僕という様な言葉を使つたりドルを自分の名で呼んだり家族の名で呼んだりする。

又 Phillips のカテゴリーでは Aggression は一つのカテゴリーであるが Robinson はこれを ① stereotyped aggression と ② nonstereotyped aggression とに分類している。前者は家庭内などで日常にみられる aggression、後者は空想的要素が多分に入つた攻撃的行動と考えられる。

て第1表に示すようなカテゴリーを設定した。

doll play の記録に際しては、これらのカテゴリーを用いて 15 秒に一事象の割で下記の例の様な带状の枠に 1 分間 4 カテゴリーの割で記入していくわけである。なお攻撃的行動は生起した時直ちに枠外に記録し、又家庭以外を用いた場合や材料を他のものに転用した時にも枠外に記すようにする。

この様にして記録されたものからカテゴリー毎の頻数を取り、それらの比較によつて結果を云々するわけであ

記録例：

1 分				2 分 Car				3 分	
E	E	O	O	Th	Th	T	T	P NHThSThNHTh	
ag.				ag.					

ag. ag.

(Phillips : 1945 による)

る。

Phillips, Robinson などの用いた資料収集法は doll play の内容をカテゴリーによつて分類した例であるが、Isch はやや異つた方法を用いている。即ち、彼女の研究

第 2 表 Doll Play Aggression の観察カテゴリー

(Sears, P: 1951 による)

Nonthematic aggression	Subject content (5) —————→	被験児自身が直接示す攻撃的行動
Thematic aggression	Bodily injury	Agent specified (1) ———→ 特定のドルが他のドルに身体的損傷を与える場合
		Agent not specified (2) —→ 事物がドルに身体的損傷を与える場合。例父親ドルが火の中に落ちる。
	No bodily injury	Agent specified (3) ———→ 特定のドルに対して被験児が行動的拘束を加えるような場合
		object specified (4) ———→ ドルが特定の場所器物に限定して行動しなければならない場合。
	No personal aggression (5) —————→	ドルが家具その他の材料に対して示す攻撃
	Demons (6) —————→	ドル被験児以外のものが攻撃をする場合。

では、大人のドルの行動カテゴリー例えば、playing interactingly, teaching, helping, directing, praise or affection……など——と子供のドルの行動カテゴリー例えば、seeking help, seeking attention, asking permission, cooperation……などを設け、母親ドルと被験児ドルの間に表われる交互作用を記号によつて記録し、その各々の頻数から相互の統制度、指示度、協調度、などの指数を算出している。*

次に、特定事象のみを捉えようとする方法に含まれるものとして Sears(34) をあげる。即ち、彼女は、その研究の性質上 doll play に際して表出される攻撃的行動の頻度のみを問題にした資料収集法を作成している。そのカテゴリーは第 2 表の如くである。

この方法では、特に作動者(物) Agent と対象 Object が詳細に問題とされるわけで、自由記述によつて記録した doll play を後でカテゴリーに照らして分類する。

例示：少年ドルが椅子で少女ドルを打つ : B—G(1)
爆弾が家に落ちる : O—eq(6)
巡査が父ドルを追いかける : O—F(6)

上記右欄は整理したもので B は少年ドルの略号、G は少女ドル、O は空想的性格をもつたもの (imagery character) の略号、eq は材料、家具などの略号、(1)、(6) などはカテゴリーの記号である。

又、doll play を開始してから最初の攻撃的行動が表われるまでの時間は潜時(latency)として測定される。

Sears の資料収集の方法は、その後幾つかの研究で用いられており、特定の行動のみを詳細にとらえようとする点は他の方法とかなり異なる処であるが、未だ攻撃的行動の意味解釈の仕方などに問題があるのではないかと考えられる。

以上の如く、doll play technique の資料収集法は未だ

ばらばらな方法を含んであり、種々の研究に就いて厳密に比較検討しうる迄には至っていない。又、これ迄の諸方法は事象を頻数による処理のみで片付けているが、幼児の人格診断という目的のためにはさらに質的な面も収集しうる方法が考えられねばならない。この点に就いては今後 doll play の事象を適格に把握した方法を研究、且つその統一を企てる必要があらう。

III Doll Play における幼児の攻撃的行動

1) 幼児のパーソナリティ研究法としての Doll play

doll play は幼児の発達初期に於けるパーソナリティや動機に関する幾つかの変数について客観的或は数量的記述を可能ならしめる方法の一つとして詳細に観察研究されてきた。アメリカに於いて Sears, R. を中心とする研究者達は特に幼児のパーソナリティ発達と家庭環境の領域にある心理学的諸問題と doll play との関係についてかなりの数の研究を報告している。ここにその幾つかの紹介を試みたいと思う。

遊びを治療法として最初に認めたのは Anna Freud であつた。以来、精神分析学や実験児童心理学に於いて幼児の発達初期における動機の考察のために doll play が小規模の実験室的役割を演じることが認められた。doll play はファンタジーの行動である。或程度の外的条件より受ける制約はあるが実際の人間関係にみられる様な行動を支配する規定や制限はそこには少ない。しかしファンタジーにおける行動は、だからといって同一人物の他の場面での行動と全く切りはなして考えることは出来ない。それはあく迄も実際の生活場面にあつて、同じ動機づけと、習慣をもつて行動している同一人物の産物である。即ち、ファンタジーにおいては物理的社会的条件の制約が多少無くなるので、いわば行動方程式の恒数が異つた場合の同一人物の動機や習慣の所産である。

従つて、ファンタジーが心理学理論上、意義を帯つて

* この方法は Bishop, M. J. abnorm. soc. Psychol., 1946, 41 及び —: Psychol. Monogr, 1951. 65. 11 (whole No. 328) を参照のこと。

くる。即ち、Sears や他の研究者達が認めているように幼児の空想的行動が他の行動にみられる法則と関連して起こると仮定するならば、doll play にみられるファンタジーはこの種の行動の新しい法則の発見と発展のために好適の実験的場面を提供することになる。そして、この種の行動について規則性を見出し、一貫性のある理論的意義をもつ関係を見出しようとする努力が彼等を中心としてなされて来た。

2) Doll play における攻撃的行動

(1) 先づ doll play にみられる攻撃的行動が施行の日数を重ねる毎に増加する現象が観察されている。これを研究者は次の様に報告している。

Phillips, R. (1945)(29) は doll play にみられる攻撃性の増加を第一施行と第三施行との比較において見出し、又1時間にわたる doll play の始めの20分間と後の20分間に表現された攻撃的行動の比較において同様にその増加を観察した。

Pintler, M. (1945)(30) は doll play を3回施行した場合、最初の攻撃的行動が表現されるのに要する平均潜時は第一施行において最も長く、第三施行において最も短いことを報告している。Sears, P. (1951)(34) も又第一施行との比較において、第二施行により高い頻度の攻撃的行動と、より短い潜時とを結果に得ている。この現象は実験者と、被験児との間の交互作用の性質いわゆる、doll play において実験者のとる許容的態度によるものと考えられる。Sears, P. は第一施行から第二施行へと攻撃性が増加するのは被験児が攻撃的行動に寛容な実験者の態度に気がつくにつれて段々と抑圧から解放されるからであろうとみている。Pintler(30) の実験的結果はこの解釈を支持する。即ち、実験者と被験児との間の寛容な交互作用の度合の強い程、攻撃的行動は多く、doll play の施行を重ねる毎にその潜時が短くなっている。40人の幼児についてみると、攻撃的行動が始めて表れるのに要した潜時は第一施行において平均時間15分、第二施行7分、第三施行5分である。

(2) 攻撃的行動の先行条件として幾多の実験的結果はフラストレーションを示唆している。フラストレーションの場面における反応の中で攻撃性は最も一般的なものの一つで、攻撃性の強さや量はフラストレーションの激しさと関連して変化するとみなされている。この関係については種々の説明が可能であろうが、Whiting, J. (30) はフラストレーションは、加算的に内的刺激を誘引し、その結果そこに存在する動因が、それが何であろうとも、収約されてその強さを増すという仮説を立てている。即ち攻撃的行動はフラストレーションによつて、動因値を

強化され、その結果、攻撃的行動が増加すると考えるのである。すると幼児が家庭にあつて経験するフラストレーションが空想的攻撃性を増強するという関係が示唆される。

Sperry, M. & Hollenberg, E. (1951)(11) は15分の doll play を4回2日乃至4日の間隔をおいて各被験児に施行し、その行動を家庭での習慣的行動を反映するものと攻撃的行動との二つに分類し、その頻度と各々の行動の行為者として使用されたドルを記録した。そして更に面接によつて、30人の被験児の母親の育児法を調査し、た幼児の欲求に対する母親の理解の程度や幼児に課した制限やきまりにもとづいて、幼児にフラストレーションを与えたその母親の態度を尺度に表現した。これによると、その尺度の上位にある母親を待つ幼児は下位に属する母親の幼児より doll play において、より高い頻度の攻撃的行動を示している。即ち、家庭生活において経験するフラストレーションが幼児の空想的攻撃性を増強している。この点に関して、一人子と兄弟のある幼児の doll play の一般的行動には、相違が少ないと報告されている。(15, 16) Heinicke, C. (1956)(18) は母親と離されて施設に収容されている場合を一つの幼児の依存的欲求へのフラストレーションと仮定し、終日(24時間)施設に保護された2才児と毎日8時間だけ保護された2才児のドルプレイの行動を比較研究している。前者は攻撃的行動の頻度がより高く、一方後者はドルへの愛情的表現をより多く示している。

フラストレーションの場面を実験的に操作した研究に Yarrow, L. (1946)(43) と Hartup & Himeno(1959)(17) がある。Yarrow は攻撃的行動の先行条件として被験児に失敗の経験をさせ、Hartup & Himeno は幼児を実験室に隔離という実験的場面によつて幼児の依存的行動が阻止されることを仮定し、その考察を試みた。そしてこの種のフラストレーションを経験した後はドル・プレイにおいてより高い頻度の攻撃性を示す結果を得た。

(3) 次に幼児は攻撃的に行動する初発動機づけを持っていると仮定した場合、この攻撃的行動を罰することによつて不安を呼び起こし、その不安が攻撃的行動を抑制するだろうことが考えられる。即ち、幼児の攻撃的行動が母親によつて罰されたならば以後、母親が側に居る時はその攻撃性は抑えられ或いは減じられることが想像される。攻撃的欲求を持ちながら、しかも攻撃的表現をすることを恐れる場合、それは葛藤となり、その葛藤自体がフラストレーションを強調する。いいかえれば幼児が攻撃性を表現しようとして不安を感じれば感ずる程、攻撃的行動への強い誘いを持つと考えられる。Sperry &

Hollenberg は幼児が家庭で罰をうけて不安を経験する結果家庭では攻撃性を明らかに表現することを抑圧されるが、同時にそれを表現したいという強い動因を持つという仮説のもとに、被験児の母親の罰のきびしさを測定し母親がその尺度の上半分に属する被験児と下半分に位する被験児の攻撃的行動の頻度の比較を試みた。家庭でよりきびしく罰される幼児により高い攻撃性を認めている。

Sears, R. (1951)(38) はこの関係について、次の様な吟味を施している。幼児が寛容な雰囲気の中の doll play の場面にいることは部分的には自分の家庭と似ているがその本来の刺激の場面と違った刺激の場面にいることである。刺激強化の法則に従うと、この doll play の場面は攻撃性を誘発し、更にその為に不安を引き起こす。しかし、Miller, N. (1948)(27) の提唱するところによると、不安勾配は攻撃性より急勾配を示しているから、母親が不在になると、不安は攻撃性よりも急速に消去すると考えられる。従つて doll play においては幼児は不安よりむしろ攻撃性を示すことが期待される。もしこの法則と前述の Whiting の仮説(葛藤自体が攻撃性の誘いを増強する)とを結び合せると、幼児が家庭で母親から攻撃的行動をきびしく罰された場合、より強い攻撃性が doll play に表現されることが予測出来る。

上述の実験において、Sperry & Hollenberg は更に考察を試みている。被験児は各々、4回 doll play を経験したが、その半数の統制群は4回とも自由寛容の遊びを経験し、実験群は第二施行において、攻撃的表現を実験者によつて罰された。その結果二つのグループは第一施行では同量の攻撃性を示したが、第二施行では実験群は攻撃的行動が抑制され始め、第三施行で実験者の態度が再び寛容になつたにもかかわらず統制群にくらべてわずか4分の1の攻撃的行動を示したのみであつた。第四施行において、この実験群の攻撃的行動は統制群が第二施行で示した攻撃的行動の程度に達した。第三施行にみられたその攻撃性の頻度の差は有意差(1%)を示している。この種の doll play の場面の条件によつてみられる攻撃性の変化は他の研究にも観察されている。(17, 22, 24, 41, 43)

(4) Levin, H. & Turgeon, V. (1957)(24) は doll play の場面に母親を導入した。被験児は第一施行で実験者1名と doll play をし、第二施行において、実験群は実験者に加えて母親が側で傍観し、統制群は実験者と見知らぬ大人が1名参加した。母親が側にいた場合、第一施行から第二施行へと攻撃性の増加が認められたが統制群は攻撃性の減少を示した。実験者1名で行われる従

来の doll play では、第一施行より第二施行へとその増加の現象があつた。従つて幼児の攻撃性に関して母親が持つと考えられる手がかりはその攻撃性の性質やそれが向けられる対象によつて異つて反応することが明らかにされた。母親は自分自身に向けられた攻撃性には耐えられないが、兄弟間や子供同志遊び仲間の攻撃的關係には比較的許容的である。従つて幼児は攻撃性はある場合は罰せられ、ある場合には、それが奨励されることを学ぶ。この実験の場合の様に、母親が側にいても、黙っていた場合、幼児は自己の衝動を自由に表現してもよい場とみなしたのであろう。一方、他人の前では攻撃的行動は適当でないと教えられていると仮定すれば統制群にみられた攻撃性の減少の説明がつく。或は自己抑制は幼児にとつて重荷であるから、側にいる母親にその重荷を移行して、母親が寛容の態度をとつたので自由に攻撃性を発揮したとも考えられる。

(5) Siegel, A. (1957)(41) は大人の不在の遊びの場における幼児の攻撃性を研究し、攻撃性が第一施行から第二施行へと減少する結果を得ている。これは、Levin & Turgeon の場合と同じく、大人不在の場において、攻撃的といった反社会的行動に対して、幼児自身の判断に頼り、そこに抑制が働いたものと考えられる。

以上が攻撃的行動の頻度に関して、空想的攻撃性は家庭におけるフラストレーションや母親の罰に関係し、又先行する実験的場面の作用に影響されることを明らかにした主な研究の結果である。

3) Doll Play における identification

次に幼児が両親との間に結ぶ同一視 (identification) との関連において doll play を検討してみよう。

Sears は幼児が自分を両親と同一視するようになる過程は両親の幼児に対する養育態度に基づくと考え、幼児が両親と同一視している度合は、どれだけ親から愛情深い養育をうけているかによるとみなした。従つて非常にきびしく罰する母親を持つた幼児は母親と低い同一視を示すと予測した。doll play において親との同一視を測定する標準として、幼児が日常の家事の遊びに親のドルを使う度数が考えられる。幼児は親の役割を取入れ、あたかも自身親であるかの如く振舞うのである。この理論に従うと、よりきびしく罰する母親の幼児は日常の家事の行為者として親のドルを使う頻度が他の幼児に比して少いという仮説がなり立つ。

Sperry & Hollenberg の研究によると罰の度合の低い母親を持つた幼児は高い度合の母親の幼児より日常の攻撃的でない行動によりしばしば親のドルを使っている。日常の生活行動の行為者として使われた各々のドル

の平均頻度の順位は同性の親、異性の親、次が同性の子供、そして異性の子供のドルの順であつた。これは刺激類似の次元と同じ様に同一視の度合の次元があつて概括作用の法則が同一視の場合にも作用すると仮定するならば、doll play において、幼児は日常の生活活動の行為者として子供のドルより親のドルをよりしばしば使うことが考えられる。

又攻撃の行為を罰した場合、同一視の次元を仮定し、それに伴つて概括作用がおこり得るとすれば、日常生活と逆に最大の攻撃性が親のドルを通して表現され、最小の攻撃性が子供のドルを通して表現されるであろう。しかし攻撃的行動は殆んど常に家庭にあつて罰をうけているので、この次元に伴つて更に不安の般化も存在すると考えられる。しかし後者の勾配が急勾配であることから、むしろ子供のドルが親のドルより攻撃性の表現にしばしば使われることが予想出来る。即ち、不安が大であればある程、親のドルより子供のドルを通して攻撃性が表現される。この仮説は実証されている。ひどく罰する母親を持つた幼児は他の幼児と比較した場合、前者は攻撃性を表現するのに親のドルと子どものドルを殆んど同じ程度に使っている。後者は親のドルを子供のドルの4倍近く使っている。その差は1%の有意を示している。即ち、より不安の度合の高い幼児はそうでない幼児より、攻撃性を表わすのに親のドルを少く使つたのである。(7)

Livin H. & Sears, R. (1956)(23) は doll play にみられる攻撃性と親との関係について、379人の3, 4, 5才児を研究して次の結果を得ている。父親と強く同一視し、又父親によつて罰を受ける男児は、父親との同一視が弱く、或は母親によつて罰されている男児に比べて高い頻度の攻撃性を示している。女児についても同じ傾向がみられ、母親と強く同一視し、その母親が罰し、しかもきびしく罰する場合、女児は高い攻撃性を示している。5才に達するまでに大抵の幼児は同性の親とより強い同一視をしている。男性は一般的に攻撃的であり、男児は父親を男性のモデルとみる。従つて男児はより攻撃的となる。躰の担当者が同性の親の場合しかもその同性の親に幼児が同一視しているのであるから、親の持つ手がかりの価値はより強くなる。従つて同性の親が躰の担当者である場合 doll play の攻撃性が強くなる。

Caron. A. & Gewirtz, J. (1951)(10) は実験者の性別による幼児の攻撃性の変化を研究した。男児は男の実験者の場合、女の実験者の場合よりも高い攻撃性を示している。一方女児は実験者の性別による差は示していない。これと同じ傾向は既述の Hartup & Himeno(17) の研究にもみられている。男児は男の実験者の場合、第一

施行、第二施行ともに、女の実験者より高い攻撃性を表現している。女児に関しては、第一施行においてのみ女の実験の場合より攻撃的であるが、第二施行に於ては、実験者の性別による差はみられていない。男性は男児に対して攻撃性を誘引するより大きな能力を持つていると考えられる。反対に女性の実験者は女児に対して攻撃性を誘引するより大きな手がかりを持つ。これは、Freud のエディプス説を支持する傾向の様に考えられる。(16) しかし Harvard univeniy における研究(22) ではこの種の実験者の性別による攻撃性の差は認められなかつた。doll play における攻撃性に対する実験者の性による影響に関しては、一貫した帰結は得られていないが、その影響は実験場面の各々の過程によつて異なる様である。しかし被験児、実験者の性別が幼児の攻撃性の研究において重要な変数であることを示唆している。

doll play にみられた攻撃性の被験児の性別による差は既に記した如く幾多の研究に観察されている。(10, 17, 30, 34, 43) Sears, P. (34) は著しい性差を報告している。男児は女児に比して高い攻撃性を示し、とくに激しい身体的攻撃性をその特徴としている。これにくらべて女児は全体的に攻撃性は低く、しかも心理的攻撃的行動の方が多。この性差は年令と共に増加しそれは男児と女児との生活経験の相違によると考えられる。

Sears, R., Pintler, M., Sears, P. (1946)(39) は家庭に父親不在の場合の幼児の攻撃性を考察している。父親不在の家庭に育つた男児は父親を有する男児より doll play にみられた攻撃性は少なかつた。女児の場合、父親不在の場合や、高い頻度の攻撃性を示している。父親は先にも記した如く、男児にとつて重要なモデルの役を果たすものであるが、不在の為、男児は母親を模倣するためか、攻撃的行動を学習する機会が少ないのであろう。即ち、父親は母親に比してより攻撃的なモデルであり、又同時に攻撃的な行動を受容する傾向が強いと考え得るから、父親の不在は doll play における攻撃性の減少という結果を招いたのである。更に従つて父親不在の影響による男女児の差は、年少者の間に小さいことが予測される。事実男女児の差は父在の場合、3, 4才で1%の有意差、5才で5%の有意差がみられ、父親不在の場合、3才では差は無く、4才、5才で男児の攻撃性がやや女児よりも高い。

Bach, G. (1946)(4) は4才～10才の学童を対象に研究して同じ結果を得ている。父親不在の子どもは doll play において父親の理想的空想を描き、父親は家族とし楽しく過ごす傾向を有する。また父親の攻撃的行動が少なく、寛容である。父親在の子どもは父のきびしい面を

doll play に強調している。これは父親の愛情、父母の調和等を欲する子供の欲求の表現といえよう。Bach は doll play における日常の理想的な行動の繰返は、強い肯定的望みの反映であると提唱しているが、これは、愛する寛大な父親がほしいという強い動機づけの存在を示しているといえようか。更に父親が不在の場合、その母親が父親に対して否定的の見解を持ち、批判的態度をもっていると、子どもは doll play において父親を攻撃的に描き出している。家庭において父親が果たす役目と、母親が父に示す態度が子供の空想的行動を決める変数であることが明らかにされた。

これらの研究は幼児の平均行動にもとづくもので、個々の幼児にあてはまるものではなかろう。しかし doll play を通して、幼児の動機やパーソナリティを測定診断するに当つて、如何に方法論上の変数が doll play における幼児の行動を左右するものであるかが、幾多の研究によつて明らかにされてきた。即ち、方法論上の変数との関係づけが先決問題で、従つて更に別の新しい変数の検討も必要となつてこよう。

文 献

- Ammons, R. B. & Ammons, H. S. Parent preferences in young children's doll play interviews. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1949, 44, 490—505.
- Ammons, C. H. & Ammons, R. B. Research and clinical applications of the doll play interview. *J. Pers.*, 1952, 21, 85—90.
- Ammons, C. H. & Ammons, R. B. Aggression in doll play: interview of two-to-six-year old white males. *J. genet. psychol.*, 1953, 82, 205—213.
- Bach, G. R. Father-fantasies and father-typing in father-separated children. *Child Developm.*, 1945, 17, 63—80.
- Bach, G. R. Young children's play fantasies. *Psychol. Monogr.*, 1945, 59, No. 2.
- Bach, G. R. & Bremer, G. Projective father fantasies of preadolescent delinquent children. *J. Psychol.*, 1947, 24, 3—17.
- *7. Baruch, D. W. Doll play in preschool as an aid in understanding the child. *Ment. Hyg.*, 1940, 24, 566—577.
- Bell, J. E. A comparison of children's fantasies in the educated projective techniques. *Amer. Psychologist*, 1948, 3, 263.
- Bremer, G. The effects of two fantasy environments on children's doll play responses. unpublished M. A. thesis. 1947. State University of Iowa (in) Sears, R. R. Influence of methodological factors on doll play performance. *Child Developm.*, 1947, 18, 190—197.
- Caron, A. J. & Gewirtz, J. L. An investigation of sex category of the interacting adult, chronological age and sex of child on aggressive behavior in doll play. *Amer. Psychologist*, 1951, 6, 307.
- Chasdi, E. H. & Lawrence, M. S. Some antecedents of aggression and effects of frustration in doll play. *Personality*, 1951, 1, 32—43.
(in) McClelland, D. C. (ed.) *Studies in Motivation*. Applton-Century-Crofts, 1955. pp. 517—528.
- *12. Conn, J. H. The child reveals himself through play; the method of the play interview. *Ment. Hyg.*, 1939, 23, 49—69.
- Despert, J. L. A method for the study of personality reactions in preschool age children by means of analysis of their play. *J. Psychol.*, 1940, 9, 17—29.
- Dollard, J. et al. *Frustration and Aggression*, Yale Univ. Press, 1939.
- Feshbach, S. The catharsis hypothesis and some consequence of interaction with aggression and neutral play objects. *J. Pers.*, 1956, 24, 449—462.
- Freud, S. *Basic Writings*. New York, Modern Library, 1938.
- Hartup, W. & Himeno, Y. Social isolation vs. interaction with adults in relation to aggression in preschool children. (in press)
- Heinicke, C. M. Some effects of separating two-year-old children from their parents: a comparative study. *Hum. Relat.*, 1956, 9, 2.
- Isch, M. J. Fantasied mother-child interaction in doll play. *J. genet. Psychol.*, 1952, 81, 233—258.
- Johnson, E. Z. Attitudes of children toward authority as projected in their doll play at two age levels. Unpublished doctor's dissertation,

- Harvard Unis., 1951.
(in) Sears, R. R., Maccoby, E. E. & Levin, H. *Patterns of Child Rearing.*, Row, Peterson and Co., 1957. pp.384—385.
21. Lebo, D. A formula for selecting toys for non-directive play therapy.
J. genet. Psychol., 1958, 92, 23—33.
 22. Levin, H. Situational factors in doll play. mimeographed notes, Laboratory of Human Development, Harvard Univ., 1951.
 23. Levin, H. & Sears, R. R. Identification with parents as a determinant of doll play aggression.
Child Developm., 1956, 27, 135—153.
 24. Levin, H. & Turgeon, V. The influence of the mother's presence on children's doll play aggression.
J. abnorm. soc. Psychol., 1957, 55, 304—308.
 25. Levy, D. M. Experiments in sibling rivalry.
(in) Barker, R. G., Kounin, J. S. & Wright, H. F. (eds) *Child Behavior and Development*. McGraw-Hill, 1943, Chap. XXIII, pp. 397—410.
 26. Meister, D. Adjustment of children as reflected in play performance.
J. genet. Psychol., 1948, 73, 141—155.
 27. Miller, N. E. Theory and experiment relating psychoanalytic displacement to stimulus response generalization.
J. abnorm. soc. Psychol., 1948, 43, 155—178.
 28. Moyer, K. E. & Gilmer, B. H., Attention spans of children for experimentally designed toys. *J. genet. Psychol.*, 1955, 87, 187—201.
 29. Phillips, R. Doll play as a function of the realism of the materials and the length of the experimental session.
Child Developm., 1945, 16, 123—143.
 30. Pintler, M. H. Doll play as a function of experimenter-child interaction and the initial organization of materials.
Child Developm., 1945, 16, 145—166.
 31. Pintler, M. H., Phillips, R. & Sears, R. R. Sex differences in the projective doll play of preschool children. *J. Psychol.*, 1945, 21, 73—80.
 32. Robinson, E. E. Doll play as a function of the doll family constellation.
Child Developm., 1946, 17, 99—119.
 33. Sargent, H. Spontaneous doll play of a nine year old boy,
J. consult. Psychol., 1943, 7, 216—222.
 34. Sears, P. S. Doll play aggression in normal young children: Influence of sex, age, sibling status, father's absence.
Psychol. Monogr., 1951, 65, 6, 1—42.
 35. Sears, P. S. Measurement of dependency and aggression in doll play.
Amer. Psychologist, 1948, 3, 263.
 36. Sears, P. S. Child-rearing factors as related to playing of sex typed roles.
Amer. Psychologist, 1953, 8, 431.
 37. Sears, R. R. Influence of methodological factors on doll play performance.
Child Developm., 1947, 18, 190—197.
 38. Sears, R. R. Effects of frustration and anxiety on fantasy aggression.
Amer. J. Orthopsychiat., 1952, 22, 498—505.
(in) Brand, H. (ed.) *The Study of Personality*. John Wiley & Sons, 1954, pp. 486—494.
 39. Sears, R. R., Pintler, M. H. & Sears, P. S. Effects of father separation on preschool children's doll play aggression.
Child Developm., 1946, 17, 219—243.
 40. Sears, R. R., Whiting, J. W. M., Knowliss, V. & Sears, P. S. Child rearing antecedents of aggression and dependency in young children.
Genet. Psychol. Monogr., 1953, 47, 135—236.
 41. Siegel, A. E. Aggression behavior of young children in the absence of an adult.
Child Developm., 1957, 28, 371—378.
 42. Wang, J. D. The relationship between children's play interview and their mental ability.
J. genet. Psychol., 1958, 93, 119—131.
 43. Yarrow, L. J. The effects of antecedent frustration on projective doll play.
Psychol. Monogr., 1948, 62, 6, 1—40.
- * なお7. と 12. は直接原典にあたりえなかつたので,
Bell, J. E. *Projective Techniques*, Longmans, 1948, Chap. XXII. Play, pp. 437—467.
その他によつてゐる。